

第 58 回加藤周一文庫公開講読会「『続 羊の歌』を読む」

——第十三章「海峡の彼方・前半」——

立命館大学博士後期課程

堀内 智吉

本章の概要

「海峡の彼方」は、加藤のイギリス旅行の経験をもとに執筆されたものである。イギリスは、日本の日常的な文化に影響を与えてきた国であり、加藤は長年受け入れてきた外国文化の起源に触れることへ大きな喜びを抱えていた。本章はまず、加藤が渡英する場面から始まり、ロンドンの街並みや「本場の」英国文化に対する思いが綴られる。その際、加藤はハーバート・ノーマン氏やイギリスの外交官たちとの様々な思い出を、英国人特有の「知的な振る舞い」という観点から語っている。中盤では、加藤が宿泊していた下宿へと場面が移り、様々な国からやってきた人々との交流が描かれる。終盤、加藤は安宿を抜け出すために、街中で新たな下宿先を探すのであるが、思いがけず人種差別の問題と直面することとなる。

【※参考】

以下の表は、「イギリスと私自身(著作集 10/p.332)」において加藤がまとめている、イギリスに対する反応である。

好きなもの	本屋
きれいなもの	安い食堂の食事
美しいと思うもの	いなか町
きたないと思うもの	停車場
尊敬するもの	偽善(政治家の)
軽蔑するもの	人種的偏見
関心のまったくないもの	王室
おもしろいと思うもの	シェークスピア(の一部)
つまらないと思うもの	シェークスピア(の一部)
比較的公正だと思うもの	BBC 放送
不合理だと思うもの	金の勘定
便利だと思うもの	ロンドン公共交通機関
不便だと思うもの	地名・人名のつづり
忘れ難いもの	人々

(太字は「海峡の彼方」で言及のあるもの)

第一段落 憧れの地——イギリスへ

それは風の強い夕暮であった。私は今でも、波頭の白い海の彼方に、薔薇色に染まるドヴァーの《白い崖》をはじめて見た瞬間を、忘れることができない。船は揺れて、乗客のなかには蒼白な顔をしてうずくまっている者もあったが、私は次第に近づいて来る《白い崖》を見つめながら、遂に自分の眼でかの島国を見るに到ったという事実に興奮していた。二〇年以上もその歴史と文化について聞き、読み、想像してはいたが、みずからその土を踏むことがあろうとは信じられもしなかった国……。

(1)加藤をイギリスへと誘った「好奇心」

○《白い崖》

イギリスのケント州にあるドーバー海峡に面した白亜の崖のこと。断崖の一部は途切れ、古代から重要な港湾であるドーバー港がある。

○薔薇色に染まるドヴァーの《白い崖》

夕日に照らされた崖を「薔薇色」と表現している点からは、憧れの地であるイギリスへやって来たことに対する加藤の喜びが読み取れる。つまり、ここの「薔薇色」は「夕日に照らされた白い崖」に関する単なる色彩描写ではなく、加藤の心理描写も兼ねている。（そのことは「興奮していた」からも明らかであろう。）

○イギリス訪問の理由

「イギリスへ行ったのは、その国を実地に見聞きたいという好奇心があったから(著作集 10/p. 329 傍点筆者)」

「好奇心があったのは、年少のころより、その国について聞くことが多かったからであろう(著作集 10/p. 329 傍点筆者)」

⇒加藤の好奇心の詳細については次の段落で解説。

【※参考】

なお、「海峡の彼方」の後半部分において「〔好奇心に加えて〕実はヴィーンの娘を忘れ難かったからである」と書いていることから、「イギリスの投資会社へ就職したヒルダ・シュタインメッツ(鷺巣 p. 415)」に会いたかったというのも訪英の大きな理由と思われる。

第二段落 生活に馴染んだ英国文化

英国は私に子供の頃の東京を思い出させた。パリの街と東京、いや、欧洲大陸のどの町と東京も似てはいなかった。しかしロンドンの一隅には、煉瓦作りの丸ノ内三菱何号館という建物が、ほとんどそのままならんでいたし、大衆食堂の店頭では到るところで私が子供の頃好んで食べたドーナツという菓子を売っていた。パディントン停車場とその界限は、そのごみ屑や媒煙や売笑婦や浮浪人や活気のある雑踏が、上野駅とその周辺を思わせた。チャーリング・クロス・ロードに軒をならべた古本屋街は、本屋の主人の表情から立ち読みの習慣まで含めて、神田の通りを思い出させた。事務所のなかに入れば、大きな革の椅子が祖父の家の《洋間》の椅子に似ていたし、知人の家を訪ねれば、両親の渋谷の家で、私たちが使っていたものと同じ《湯たんぽ》が家族の数だけならべてあった。暖房のない冬の寝室を、私はフランスで暮しているうちにほとんど忘れかけていた。また必ずしも英国と結びつけずに子供の頃から私の慣れていた《午後のお茶》や《ブリッジ》——《お茶》は母が女学校で英国人の尼僧から習い覚えたにちがいないし、《ブリッジ》は海軍の将校であった伯父が、英国留学から帰って親類の間に^{ひろ}拡めたにちがいない。日比谷の中学校の校長は、生徒を講堂に集めて訓話をする度に、《英国の宰相グラッドストーン》を引用していた。その言葉の内容は、《英国の宰相》にかぎらず、どこの誰でも思いつきそうなことにすぎなかったが、決して日本の宰相やフランスの詩人やドイツの哲学者の言葉ではなかった。

(1) ロンドンの様子

○煉瓦作りの丸ノ内三菱何号館という建物

明治27年、現在の馬場^{ばばさき}先通り(東京丸の内)に面した一角にオフィスビルとして三菱一号館が建築。明治政府の建築顧問であったイギリス人、ジョサイア・コンドルによる設計で、煉瓦造、イギリスの建築様式をとっていた。

「ロンドンには赤煉瓦造りの建物を多く見かける。たとえばロンバート街もそのひとつである。東京の丸の内の一角、三菱村といわれる地区は、ロンバート街をモデルに[...]二一に及ぶ赤煉瓦造りの三菱の建物が建てられ、あたりは「一丁倫敦」と呼ばれた(鷺巣 p. 415)」



(左：現在のロンバート街 右：三菱一号館)

○パディントン停車場とその界限

イギリスの首都ロンドンのパディントン地区にある、ナショナル・レールとロンドン地下鉄が接続する鉄道駅。ロンドンの「西の玄関」とも呼ばれるほど、利便性の高い駅の一つ。ヴィクトリア朝時代の代表的な駅建築であり、大アーチ状の鉄骨屋根は設計者のイザムバード・キングダム・ブルネルの技術力の高さを象徴している。

駅のすぐ周辺には労働者階級向けのテラスハウス（長屋住宅）が並んでいた。多くはヴィクトリア朝時代に建てられた古い住宅で、戦災の被害も一部に見られた。一帯は当時、中～低所得層の居住区であり、都市の中心部に比べて地価も安価。家賃の安い下宿やB&B（ベッド＆ブレイクファスト）が多数あった。再開発はほとんど始まっておらず、煤けたレンガ造りの建物や倉庫が駅の背後に広がる。駅前にはパブ、チップショップ（魚のフライ店）、新聞スタンド、カフェなどが軒を連ね、鉄道利用者や近隣住民で賑わった。商業施設は大規模なデパートというよりも地元密着型の個人商店が中心。駅構内には新聞売り、靴磨き、荷物運搬人が活動し、活気に満ちていた。

【※上野駅との対比⇒どちらも戦後の首都の「少し荒れた下町」であった（?）】



《左：パディントン駅 右：上野駅》

○チャリング・クロス・ロード

「チャリング・クロスは古書店街として知られ、東京でいえば神保町界限(鷺巣 p. 416)」である。また、18世紀後半以来、六つの道が交差するチャリング・クロスはロンドンの中心と見なされるようになり、ロンドンからの距離を測る際の基準点とされてきた。そのため、ロンドンの地区の位置を表すのに、古くから道路標識や地図にはチャリング・クロスからの距離が表示されていた。イングランドの文学者サミュエル・ジョンソンは「チャリング・クロスには人間の存在その満ち引きの全てがある」と述べている。彼の目には、知識、商業、文化、階級、貧困、芸術、労働といったあらゆる要素が交錯する、「人間存在の縮図」としてこの地が写っていたのであろう。



(2)加藤の身近にあった《英国》

○《湯たんぽ》

イギリスの陶器メーカー「ロイヤルドルトン」は、ヴィクトリア朝期に「衛生陶器」の販売によって業績を伸ばした会社として知られている。「衛生陶器」とは、陶器製の洗面台、バスタブ、トイレなどであり、湯たんぽも商品として存在していた。

「〔湯たんぽは〕かつては陶器製だったが、大正時代から金属製に変わり、おそらく加藤は金属製の湯たんぽを使っていたのだろう(鷲巢 p. 416)」

○《午後のお茶》

アフタヌーンティー。イギリス発祥の喫茶習慣で、午後に紅茶と共に軽食や菓子を喫食する茶会である。伝統的には上流階級における社交行事であり、「礼儀作法、飾る花や使う食器、会話の内容にまでかわる社交文化」としてイギリスに根付いたもの。日本では戦前から中産階級を中心に広がっており、加藤の家の習慣でもあった(鷲巢 p. 416)。

○《ブリッジ》

「私の伯父は、海軍中將であったが、座談のうちにイギリスを賛美することが多く、余暇にはイギリス人の好むというブリッジの遊戯を楽しんでいた(著作集 10/p. 330 強調筆者)」

⇒(コントラクト)ブリッジは、トランプゲームの中で数少ない、国際共通ルールが確立しているゲームのこと。

【※英仏文化の特色について】

加藤は「日本文化の雑種性」において、「英仏の文化を純粋種の文化の典型であるとすれば、日本の文化は雑種の文化の典型ではないかということだ。(…)私はこの場合雑種という言葉によい意味もわるい意味もあたえない。純粋種に対してもおなじことである(著作集 7/p. 9)」と述べている。

純粋種としての英仏文化とはどのような意味であるか。加藤は以下のようにまとめている。

英仏両国に暮らしている間、英仏両国民の自国の文化に対する極端に国民主義的な態度によって、大いに刺激されたのである。(…)要するに英国的な特色は学問芸術から服装や生活様式の末端にまで及んでいるということ、英国の文化は日本でのように医学は外国式で美術はまた別の外国式だが生活様式は日本流だというような混雑したものではないということである。英国を仏国にとりかえても、およそ同じようなことがいえる。(著作集 7/pp. 6-7)

○《英国の宰相グラッドストーン》

ヴィクトリア朝期の政治家。反帝国主義。4度にわたり首相を務めた（在任期間：1868-1894の間に4期）。卓越した雄弁家・道徳的な政治思想の持ち主として知られる。

「私の中学の校長は、天長節だろうと、新年だろうと、演説の機会あるごとに、(…)その言葉を引用した(著作集 10/p. 329)」

○「決して日本の宰相やフランスの詩人やドイツの哲学者の言葉ではなかった」

加藤が中学に在籍していたのは1931-1936年。その間に、満州事変、犬養毅暗殺、国際連盟脱退など、日本は軍国主義へと傾く流れのまっただ中にいた。その時代の日本の宰相は、斎藤実、岡田啓介ら元海軍将校の宰相であり、反帝国主義のグラッドストーンとは真逆な人々であった。フランスの詩人やドイツの哲学者として加藤が特定の誰かを想定したのかは不明だが、比較対象として挙げたのは次のような理由からだろう。前者は華麗な表現を用いるものの、抽象的・個人主義的で、政治的实践より観念や美に傾いている。後者は厳密さを追求するが、難解・観念的であり、政治的実効性や市民道徳には結びつきにくい。つまり、独仏の詩人や哲学者は、グラッドストーンのように平凡でありながらも明快な語りをしてくれないという意味が込められているのだと思われる。

(3)「好奇心」の正体

加藤をイギリスへと誘ったのは、「文化的興味」や「ヒルダへの恋慕」だけではない。戦前から戦後への時代の流れが、加藤にイギリスを訪れさせたのである。

「いや、中学校の校長にかぎらず、またその伯父にかぎらず、明治以来、ことに日英同盟以来、イギリスのわが国に与えた影響が、日常生活の末端にまでおよんでいた、ということもある。フランスの影響は、文学藝術に、ドイツの影響は、法律・陸軍・医学・音楽・工業技術にまでおよんだけれども、その影響は、日常生活の上には、ほとんどまったく感じられない。洋間といい、洋食と称し、洋菓子、紅茶、洋服とよぶものは、すべてイギリス風であって、決してフランス流でも、ドイツ流でもなかった。私は、そういう環境のなかに育ったのである。衣食住の末端における「西洋」とは、イギリスの調にほかならなかった。また中等教育で、私がはじめて習った西洋のことばも、独仏語ではなくて英語であった（わが教育家が日本の子供に外国語を教えるには、まずアメリカの俗語からはじめなければならぬという不思議な考えに到達したのは、きわめて最近、敗戦以後のことである）。永井荷風流に言えば、東京において支店を見なれた私は、イギリスにおいて、本店を見とどけたいという好奇心をもつようになった。（著作集 10/p. 330）

ここでは、ほかのヨーロッパ諸国の文化と比較して、イギリス文化が日本の「日常生活」において広く普及していたことが語られており、加藤もそのことを肌で感じていたことがわかる。

長ずるにおよび、私はまた、天皇陛下が米英討伐のみことのりを発せられ、町には「鬼畜米英」の貼紙の現れるのをみた。イギリス征伐にいかなる因縁があるのか、一介の貧書生の、もとより知る由もなかったが、「鬼畜米英」の標語は、たとえいくさの宣伝であるにしても、軽薄すぎるように私には思われた。そのいくさは、およそ私の想像したとおりの結果に終わった。すると町には「民主主義」ということばが大いに行われるようになり、「民主主義はアメリカから押しつけられた」にもかかわらず——いや、実は、おそらく民主主義がアメリカから押しつけられたと感じられたがゆえに——その民主主義の典型は、アメリカではなく、イギリスにあると考えられるようになった。かくして日本にとってのイギリスは、富国強兵の手本（したがって日本西洋化の手本）から一転して「鬼畜」となり、再転して「民主主義」の手本となった——日本側からそうみられてきたその本国の実情は、一体どういうものであろうか。これもまた、私の好奇心を刺戟したことの一つである。（著作集 10/pp. 330-331 強調筆者）

第二次世界大戦中、敵国であったアメリカやイギリスは「鬼畜米英」の語でもって攻撃されていた。しかしながら、終戦後の日本にアメリカが「民主主義」を持ち込むやいなや、アメリカへの嫌悪は「民主主義はイギリスのものである」という形で表出され、かつての「鬼畜」扱いとはうって変わって、イギリスは日本にとっての「手本」となったのである。このような、日本における戦前から戦後にかけてのイギリス受容の変遷が、加藤の好奇心を駆り立てたのである。

第三段落 《英国》のもの/そうでないもの

長ずるに及んで独仏の文芸や医書を読むようになった私は、書物を通じて、欧洲大陸の文化に接するようになった。岩波文庫、丸善と南江堂、帝国大学の仏文研究室と医学部附属図書館。人体の各部分とあらゆる病気の名まえを私はドイツ語で覚えていた。しかしたとえば、日常の食器をドイツ語で何と称ぶのかを知らなかった。マラルメとその周辺の詩人たちを読んではいたが、《カフェ》と称ばれる社会制度の実際を想像したことはなかった。しかし《英国》は——たとえそれがヴィクトリア朝の色褪せた影にすぎなかったとしても、記憶のさかのぼれるかぎり、書物や学問のはるか以前から、私の生れて育った環境の、空気のなかに漂っていた。そのいわば英国的なものの断片、互いに何の関係もなく周囲にばらまかれていて、当時の私がまとめて考えることもしなかったもの——祖父の朝食や家具から、母の《お茶》まで。伯父の《ブリッジ》から、中学校の校長のグラッドストーンまで。そのすべては、英国の土を踏むや否や、互いに密接な関係のある全体として、はっきりと意識されるようになった。かねて英国と結びつけて考えてはいなかった習慣も、実は本来英国から輸入されたものだということが、実に明瞭に理解されるようになった。おそらく中学校で習った英語を例外として。それだけはむしろ逆に、かねて英国人の話す言葉だと考えていたにもかかわらず、実はかなりの程度まで日本製であった。こちらのいう

ことの意味は彼らに通じたが、彼らの話の意味は、私に通じないことが多かった。おそらくその責任は、学校にばかりではなく、私の側にも少なくなかったのであろう。しかし少なくともその教科書が、おどろくべき技術をもって、生活の実際とも、文学の精髓とも、ほとんど全く関係のないように、編さんされていたからでもあろう。

(1) 異国文化

○マラルメ

19世紀フランスの象徴派の代表的詩人。代表作に『半獣神の午後』『エロディヤード』『サイコロの一振り』、評論集『逍遙遊（デイバガシオン）』など。

加藤は「マラルメにとって詩作の主体は、現実の日常的な「私」ではなくて、非個人的な意識である」としたうえで、「〔意識は何らかの対象を持つ。〕その対象は、マラルメの場合には、世界の全体」であったと述べている。（著作集 21/pp. 328）

また、「マラルメにとって詩作とは、宇宙の秩序を、言葉の秩序に移転させること（著作集 21/pp. 329）」であった点に注目し、「結局のところ、(…)世界は一冊の美しい本に帰着するようにできている」というマラルメの言葉と、ヴィトゲンシュタインの「世界は物の総体ではなくて、事実〔＝論理的イメージ＝思想＝意味のある命題〕の総体である」という言葉とを比較して、両者が世界を「一冊の本」や「命題の集り」、すなわち「言葉の秩序」に還元されるものとして理解していた点を強調している。

○《カフェ》と称ばれる社会制度

カフェは誕生当時から、飲食がメインというよりは、文学サロンや社交場として広く使われていた。一般には広まっていなかった百科事典や新聞が閲覧できたり、チェスが行われていたり、議論の場としても盛んに活用されていた。

○ヴィクトリア朝

ヴィクトリア女王がイギリスを統治していた 1837 年から 1901 年の期間を指す。この時代はイギリス史において産業革命による経済の発展が成熟に達したイギリス帝国の絶頂期であるとみなされている。「パディントン停車場」はヴィクトリア朝時代に建設されたものであり、グラッドストーンも同時代の宰相である。

【《 》の意味】

加藤はルーツが海外にあるものに対して「《 》」の記号を使う傾向がある。ほとんどの場合、それは著作名や作品名で使用されているが(例えば『続・羊の歌』において「中世」では《ランスの微笑》(p.84)、「音楽」では『エディプス王』(p.126)など)、本章においては日常的な文化(《洋間》や《湯

たんぽ》)に対しても使用されており、加藤にとってそれらの英国文化は日本人である自身に馴染んだものでありつつも、やはりルーツは海外にあるものであると認識していることがうかがえる。

(2)英語教育批判

○「おどろくべき技術をもって、生活の実際とも、文学の精髓とも、ほとんど全く関係のないように、編さんされていた。」

ここでは、日本の英語教育が、実践的な英語能力を涵養する機能を果たしていないことが述べられている。これに関して、ヨーロッパ滞在から帰ってきた加藤は、日本の英語教育に関する批判を以下のように展開している。

私は英語教育を早い時期からはじめることに賛成である。(…)しかしそれは英語の知識が役にたつということを前提としての話だ。役にたたなければ、時間と勢力の浪費にすぎない。(…)もし一週四時間中学校の三年間に英語を教える暇があれば、それだけの時間を社会科に投じたらよかろう。一週四時間三年間の社会科の結果は、多分将来の総選挙が少しでもましな形で行われるということである。一週四時間三年間の英語教育の結果は、多分日本の子供が「ありがとう」というかわりに「サンキュー」ということである。(『世界』1955 p. 142)

加藤は、1950年代の日本において、中学義務教育のカリキュラムに英語を組み入れることに対して懐疑的であった。若いうちから外国語の学習をすること自体には賛成するものの、日本人が英語を身に着けるために要する労力を考慮すれば、一週間に数時間の英語の授業だけではとても実践に耐えうる英語力は身に着けられないと指摘しているのである。

私自身、戦前旧制の中学校で五年間英語を習い、特に勉強したわけではないが、特に怠けたわけでもなかった。その結果は、新聞がよめず、英国人のいうことは一切わからず、もっとも簡単な自分の考えを英語であらわすこともむずかしいのだ。(…)〔英語教育を〕やる以上は使いものにしなければ時間が不経済だが、使いものにするためには、とても一週四時間現在の幼稚な教科書でやっていたのではだめであり、英語をよく知らない教師から習っていたのではだめであらう。(『世界』1956 p. 146)

加藤の英語教育批判は、自身の経験を踏まえてのものでもあった。5年間の英語教育では英字新聞を読むことも、外国人と十分なコミュニケーションをとることもままならなかったのである。そのような実情にも関わらず、加藤の英語教育批判に関しては、いくつかの反論が飛んできた。曰く、英語を学ぶことは学生が世界的視野を持つことに役立つであるとか、国際会議で活躍する者となるには英語を話せる必要があるなどである。では、加藤はそのような批判に応答しつつ、どのような英語教育を実施すべきだと考えているのか。

「第一、(…)つめこみ主義を徹底し、うすっぺらな教科書の五六冊ではなく、少なくともあの十倍を読まなければならない。新聞の社説もろくによめない程度で、国際的視野がどうのこうのと、御たくをならべてもし方がないと思う。第二、英語のほんとうにできる教師は英国人である。英語を教える学校では、教師の少なくとも半分以上が英語を母国語とする教師でなければならない。そうして、簡単な思想の交換が耳と口でどうにかできるようにする必要があるだろう。国際会議が問題になるのはそれからの話だ。」(『世界』1956 p. 146)

加藤の示した解決策は至極単純なものであった。まずは学習量を圧倒的に増やすことである。教科書の登場人物が挨拶や自己紹介をしているだけの英文ではなく、英字新聞の読解に近づけるような英語をたくさん読めというのである。また、外国語のコミュニケーション能力を向上させるには英語を母国語とする者に頼るほかないという。加藤の指摘から 70 年たった現代において、これらの改善がどの程度されているのかは検討する余地があるだろう。

第四段落・第五段落前半 多才な外交官たち①

私に英文学のたのしみを教えたのは、東京の中学校ではなくて、スエズの戦乱の後にカイロで自殺したカナダの外交官ハーバート・ノーマン氏であった。「近代国家としての日本の成立」や「忘れられた思想家・安藤昌益」の著書によって知られているこの歴史家は、日本で生れて日本語を読み英国で教育をうけてラテン語を読み、ローマ史に詳しく、広く英文学にも通じていた。「ラテン語の詩文は漢文に訳すといいと思いますよ、簡潔で、意味が凝縮されていて…」。

私がノーマン氏と度々会ったのは、パリでユネスコの会議にカナダを代表していた時のことである。大使としてカイロへ赴任する前のことであった。ユネスコ代表の仕事には暇があったのかもしれない、あるいはむしろ、暇をつくる余地があったのであろう。一般に外交官の仕事の、または少なくとも関心の、大きな部分は、《コクテル・パーティ》にあるらしいという印象を私はもっていた。しかしノーマン氏は「今日はコクテルがあるだけだから、パリにいなくてもよい」と事もなげにいった。そうしてある秋の日に、出かけた先は、英国大使館の書記官の私宅であった。その家がパリ郊外のどこにあったか、そこに英国の大学で同窓であったというもう一人の外交官が、ニュー・ジーランドから来ていたか、オーストラリアから来ていたか、そういうことのすべてを私は今忘れてしまった。しかし集った三人の外交官の一人が日本の歴史の専門家であり、もう一人がペルシャの一三世紀の詩を翻訳していて、最後の一人がロシアの一九世紀の劇作家の全集を校討し、オックスフォード大学出版社で刊行しようとしているという話に、おどろき呆れたことだけは覚えている。その印象は強かった。それはもちろんコン・ウェルス諸国の外交官のなかでも例外にちがいがなかったろう。

(1)英国の知識人たち①

○カナダの外交官ハーバート・ノーマン氏

日本生まれのカナダの外交官、歴史家。トロント大学、ケンブリッジ大学、ハーヴァード大学で、日本史、中国史を修める。一九三九年カナダ外務省に入り、一九四〇年から四一年まで在日カナダ公使館員。戦後再び来日し、駐日カナダ代表部に在籍。この間に都留重人、渡辺一夫、丸山眞男などと交流があった。アメリカの要請で連合軍総司令部に入る。一九五一年の対日講和条約交渉ではカナダの首席随員、その後ユネスコ大使を経て、一九五六年にエジプト大使に就く。アメリカのマッカーシズム旋風が吹き荒れるなか、共産主義者の疑いをかけられ、一九五七年四月にカイロで自死。

○集った三人の外交官

加藤は外交官の主な仕事が《コクテル・パーティ》にあると考えていた。しかし、ノーマン氏を含めたこの三人の外交官は、《コクテル・パーティ》には出席せず、パリ郊外の私宅で異国の文化について語り合うのである。しかもそれは、外交官として赴任している地域の話ではなく、自身が関心を持ち「仕事とは無関係に」取り組んでいる異文化研究に関する話であった。加藤は、彼らを指して「コモン・ウェルス諸国の外交官のなかでも例外にちがいはなかったろう」と評する。

⇒このような《英国》の外交官の振る舞いに関しては次段落でもう一度取り上げる。

第五段落後半 多才な外交官たち②

しかし、後年、友人の社会学者 R・P・ドーア氏と香港に旅したとき、私は再びパリ郊外の三人を思い出した。香港にはロンドンで面識を得た若い英国の外交官 H 氏がひとりで住んでいた。訪ねてゆくと、その小さな部屋の、机の上には読みかけの「老子」が、ピアノにはバルトークの楽譜がひらいたままおいてあった。しばらくその部屋で話していたあとで、私たちを中国人の料理店へ案内してくれたが、そこには外国人の客はひとりもいなくて、現れた中国人と、H 氏は広東語で談笑すること、あたかも母国語で話すかの如くであった。私はすでにロンドンで彼の日本語やフランス語に全く訛りのないことを知っていたので、その広東語の流暢さにおどろいた。いや、「広東語はあまりよくない」と H 氏は笑いながらいった、「いちばん楽なのは、マレイ語でしょうね」。マレイの奥地で老人をたずね、土地の伝説を蒐集していたからだという。「あすこには長くいました」「君はたしかアラビア語も話すのじゃないか」とドーア氏がいった。「なに日常生活に不便をしない程度ですよ」とその不思議な英国人は答えた。老大国の特徴は、そのつくり出す人物の途方もない道楽が、しばしば道楽を越えてどこまで拡ってゆくのか見当のつかぬ点にあるのかもしれないと私はそのときにも思った。

(1)英国の知識人たち②

○社会学者 R・P・ドーア

イギリスの社会学者。日本の経済および社会構造、資本主義の比較研究を行った。加藤のブリティッシュコロンビア大学着任にも協力。加藤との共著に『戦後の日本 転換期を迎えて 国際シンポジウム』(1978)や、『日本を問い続けて 加藤周一、ロナルド・ドーアの世界』(2004)がある。

○「老子」

老子は中国春秋時代における哲学者。諸子百家のうちの道家は彼の思想を基礎とするものであり、また、後に生まれた道教は彼を始祖に置く。書物として『老子(老子道德教)』を記したとされる。

○バルトークの楽譜

ハンガリー出身のクラシック音楽の作曲家、ピアニスト、民俗音楽研究家。本人が「若い頃の私にとって、美の理想はベートーヴェンだった」と回想しているようにドイツ・オーストリア音楽の強い影響を受けつつも、ハンガリー国内の民俗音楽の収集とそれらについての科学的分析から得た知見や、同時期の音楽の影響という三つの軸から独自の音楽作品を生み出した。

○「老大国の特徴は、そのつくり出す人物の途方もない道楽が、しばしば道楽を越えてどこまで拡ってゆくのか見当のつかぬ点にあるのかもしれないと私はそのときにも思った。」

この外交官 H は、複数の原語をこともなげに話すわけだが、それは「仕事として」身に着けた能力だけではない。「読みかけの『老子』」やピアノに置かれた「バルトークの楽譜」は、彼が道楽として(あるいは教養として)異文化を学び、自らの血肉としていることを示している。このことは、前段落に登場した外交官たちにも共通する。彼らも、「仕事として」異国と交流することとは別に、みずからすすんで異文化との接点を持っていた。

【※参考】

関連して、第二段落で取り上げた英仏文化の純粋性という文脈で、加藤は次のように述べている。

「英仏にもそれぞれちがった形ちがった領域に外国の文化に対する強い好奇心がある。しかしそれは多くの場合に自国の文化にとって欠くことのできない原理を外国にもとめるということではなく、外国との接触によって本来の原理の展開を豊かにするということにすぎない。原理に関しては、英語の文化も、フランス語の文化も、純粋種であり、英語またはフランス語以外の何物からも影響されていないようにみえる。(著作集 7/p. 7)」

第六段落 大英帝国の「知的な侘び」

ノーマン氏の日・仏語は、流暢ではなかった。私の英語は幼稚であった。しかしその三つの言葉のどれでも私たちは意を通じることができた。「あなたは《アビンガ・ハーヴェスト》を読むといい、きっと好きになりますよ」——たしかに私は好きになり、手に入るかぎりの E・M・フォースターを読むようになった。そればかりでなく、私はまたいわゆるブルームスベリの諸家とジョン・オーブリの散文の妙趣を、ノーマン氏から教わったが、そこには、たしかにフランス語の文学とはちがう別の世界が^{ひら}展開していた。その世界を定義することはむずかしかったし、今でもむずかしい。しかし私のなかにもし英国の文化に対する一種の親愛感があるとすれば、それは彼らの散文の——何というべきか、おそらく「知的な侘び」とでも名づけたい一種の性質と関係しているにちがいないと思う。「侘び」の真髄は、「南坊録」もいうように、金殿玉楼の華麗を避けて、浦の苦屋の質素に美の極致を見ることであろう。今ある種の英国人が、その著書に題して、大上段には構えず、あるいは《アビンガ・ハーヴェスト》といい、あるいは《ザ・コモン・リーダー》という、その趣向を私は好むのである。現にノーマン氏その人にも似たところがあって、知的洗練の微妙さに、話相手の感情に対するおどろくべき敏感さが加わっていた。

(1) イギリス文学者

OE・M・フォースター

イギリスの小説家。主な作品に『ハワーズ・エンド』、『インドへの道』などがある。異なる価値観をもつ者同士が接触することで引き起こされる出来事について描いた作品が多い。「個人主義的なヒューマニズムが現代ヨーロッパの知識人の大多数に典型的な考え方」であることを、「もっとも典型的な表現」で示した人物であると評されている(著作集 2/p. 280)。「およそ一人の外国の作家をフォースターの場合ほど身近に感じたことは一度もないといわなければならない。(著作集 2/p. 282)」

○《アビンガ・ハーヴェスト》

原題は「*Abinger Harvest*」。E・M・フォースターの随筆。「私はあるときリットン・ストレーチーに対する私の讃歎とプリッチェットの文章に対する好みを〔ノーマン〕氏に打ち明けたことがある。するとノーマン氏は、即座に、それならば『アビンガ・ハーヴェスト』を読んでもみ給え、(…)」(著作集 2/p. 281)」

○ブルームスベリの諸家

1905 年から第二次世界大戦期まで存在し続けたイギリスの芸術家や学者からなる組織である。E・M・フォースターもその一員であり、他には経済学者のジョン・メイナード・ケインズや小説家のヴァージニア・ウルフなども参加していた。

「彼らのなかには、古典的教養と理性的な人間への信頼、鋭敏な感受性とイギリス人が「ユーモア」

とよぶ知的能力、また殊に自分自身とその文化を相対化することのできる寛容で開かれた精神があった。(著作集 15/p. 274)」

○《ザ・コモン・リーダー》

原題は「*The Common Reader*」。ヴァージニア・ウルフが1925年に発表したエッセイ集であり、専門的な批評家ではない「普通の読者 (common reader)」の視点から文学を楽しむことの意義を探究する著作。

○ジョン・オーブリの散文

イングランドの好古家、作家。『名士小伝』という伝記短編集の作者として有名。同書では、オーブリの見聞きした様々なゴシップが、彼の正直な感想と共に記されている。

(2)「知的な侘び」

○「南坊録」

筑紫国の立花家に千利休の秘伝書として伝わった古伝書。ただし、同時代を著した書籍としては内容や用語等に矛盾点が指摘され、現在、研究者の間では元禄時代に成立した偽書として認知されている。かつては、「わび茶」の概念の形成に大きな影響を与えたと考えられてきたが、現在では実際の成立年代である、江戸期の茶道における利休回帰を裏付ける資料として捉えられている。

○「侘びの神髄」

ここで加藤は「金殿玉楼の華麗を避けて、浦の苦屋の質素に美の極致を見ること」と書いているが、より正確には「金殿玉楼の華麗を味わい尽くすことで、浦の苦屋の質素に美の極致を見ること」というべきであろう。すなわち、明確に「美」として現れるものが何であるかを知ったうえで、質素さの内に現れる「かすかな美」を感じ取る様を「侘び」というのである。であれば、加藤が「知的な侘び」と呼ぶ振る舞いも、ただ知識を持っていることに驕って、上から目線になることなく、確かな知識の積み重ねの極致として、些細な「知の揺らぎ」を看取するような所作を指すのである。そのことは、「知的洗練の微妙さに、話相手の感情に対するおどろくべき敏感さが加わっていた。」という加藤の感想にも表れている。

【※参考】

なぜ英国人が非ヨーロッパ社会に接したとき、自身の仕事の範疇を超えてまで、それらへの探求をするのかという「微妙な問題」への回答として加藤は、英国人には「人種と階級とを超えた人間世界全体への関心と、しばしば小さな個別的事実への、殊にその複雑な「ニュアンス」への愛情が、その人格のなかに微妙に統一されていた(著作集 15/pp. 276-277)」からだと述べている。

第七段落 ノーマン氏との思い出——最後の会話

私が最後にノーマン氏に会ったのは、パリの街頭で、全く偶然の機会にであった。私たちは深夜の街頭で、長い立話をした。話はその頃米国で猖獗^{しょうけつ}を極めていたマッカーシー上院議員の《非米活動委員会》に及び、ノーマン氏は、そのとき、何故か、今でも私にはその理由がよくわからないけれども、彼自身をとりまく外務省内の微妙な関係を、人の名まえまで挙げて、語りはじめた。そればかりでなく、適当な機会に外務省を退き、カナダ太平洋岸の大学に去って、そこで日本史の研究に専心できたらよいだろうという意味のことさえも、半ば冗談のようにつけ加えた。その話は、しばらく会わなかった私たちの間のこととして、また深夜の街の立話としても、かなり唐突の印象を免れなかった。その謎めいた印象は、その後ながく私のなかに残った。しかしノーマン氏は大学へは退かず、外交官の仕事をつづけながら、カイロで死んだ。私はそのとき、後日、私自身が、その太平洋岸の大学へ退いて閑暇を愉しむことになるうとは、夢想もしていなかったのである。

(1)

○マッカーシー上院議員の《非米活動委員会》

アメリカの共和党議員であったジョセフ・マッカーシー、およびアメリカ合衆国下院に存在した「非米活動調査委員会 (House Un-American Activities Committee)」のこと。マッカーシーは、1950年代初頭に「赤狩り」と呼ばれる共産主義者への過剰な追及運動を行った。また、「非米活動調査委員会」も20世紀中頃、特に冷戦初期に、アメリカ国内の「共産主義的」・「反米的」思想や活動を調査・追及した。

【※参考】

○マッカーシズム

1950年代にアメリカ合衆国で発生した反共産主義に基づく社会運動、政治的運動。アメリカ合衆国上院（共和党）議員のジョセフ・マッカーシーによる告発をきっかけとして「共産主義者である」との批判を受けたアメリカ合衆国連邦政府職員、マスメディアやアメリカ映画の関係者などが攻撃された。

○「その謎めいた印象は、その後ながく私のなかに残った」

上述の「赤狩り」の影響を受けて、ノーマンは自死している。この「最後の会話」の場面からは、何らかの危機を感じていたノーマンの焦りが加藤にも伝わっているように思われる。

○「カナダ太平洋岸の大学」、「その太平洋岸の大学へ退いて閑暇を愉しむ」

ブリティッシュコロンビア大学のこと。1960年10月、同大学准教授として着任。1969年まで日本文化史を講じる。この10年間を加藤は「蓄積の時代」と呼んでいる。

参考文献

- ・加藤周一
- (1955)『世界』「信州の旅から——英語の義務教育化に対する疑問」岩波書店、pp. 141-146。
- (1956)『世界』「再び英語教育の問題について」岩波書店、pp. 142-146。
- (1968)『続・羊の歌』岩波書店。
- (1979)『加藤周一著作集 2』「E・M・フォースターとヒューマニズム」平凡社、pp. 278-301。
- (1979)『加藤周一著作集 7』「日本文化の雑種性」平凡社、pp. 5-29。
- (1979)『加藤周一著作集 10』「イギリスと私自身」平凡社、pp. 329-351。
- (1979)『加藤周一著作集 15』「E・H・ノーマン・その一面」平凡社、pp. 271-277。
- (1997)『加藤周一著作集 21』「マラルメとプルースト」平凡社、pp. 327-330。
- ・鷲巣力(2018)『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店。